

ラーシーディーンの紅銭 (= 回文銭) について

中村雅之

1. はじめに

ここに紹介するのは、19世紀後半に新疆のクチャで蜂起したラーシーディーンの発行した貨幣で、古銭収集の世界で「回文銭」と称されているものである。アラビア文字アラビア語が記されたこの貨幣は、古銭市場にもかなりの数が出回っており、状態を選ばなければ入手はさほど難しくない。ここでは古代文字資料館の管理するものの中から比較的状态の良い2枚に基づいて銘文の解説を試みる。文字の読みについてはウェブサイト「XINJIANG COINS」(<http://www.xinjiangcoins.com/>) および「TransAsiart」(<http://www.transasiart.com/>) における解説を参考にしている(ただし転写方法はいずれとも異なる)。なおアンドレア・T「新疆回文銭の解説」(『収集』1983年5月号)という文章があるようであるが、未見。

本稿におけるアラビア文字のローマ字転写は、本田・石黒『パスポート初級アラビア語辞典』(白水社1997)の方式によるが、「t」「d」等の下に点が添えられる文字については下線を付してこれに代える。転写に際しては必要以上の解釈を加えず、翻字に近い形のものとするが、母音は正則アラビア語の読みに従って補う。ただし、格変化語尾は補写しない。

2. 表面の銘文

「sayyid ghāzī Rāshīdīn Khān」(上部から反時計回りに読む)

「ムハンマドの血統、勝利の戦士、ラーシーディーン・ハーン」

最初の2語「sayyid」「ghāzī」はともにイスラムの統治者に与えられる一般的な称号である。「sayyid」は「主人」「紳士」を意味する一般名詞であると同時に、「預言者ムハンマドの血をひく者」をも意味するが、実際にはムハンマドの子孫であることを必ずしも意味しない。「ghāzī」は「聖戦の勇士」で、これも称号である。

「Rāshīdīn」はクチャで蜂起した人物の名であるが、「Rashīdīn」とも読めそうな字形になっている。ここでは{R}の左下の線を{A(アリフ)}と見て「Rāshīdīn」と読んでおく。

この貨幣に「Rāshīdīn」と記される人物を、新疆ムスリムの研究者は「ラーシュ・アッディーン(Rāsh al-Dīn)」と記することが多い。⁽¹⁾ この表記はムッラー・ムーサー・サイラーミーの著した歴史書『Tārīkh-i amniyya』によったものようである。サイラーミーはクチャの蜂起でラーシーディーンと行動を共にした人物とのことであるから、その表記は信頼に足ると言えるが、貨幣に「Rāshīdīn」とあり、歴史書に「Rāsh al-Dīn」と記されるのはなぜか。おそらく前者は実際の発音に近い表記を取ったもの、後者はア

ラビア語式の表記に徹したものであろう。サイラーミーの書はアラビア文字による東チユルク語（＝いわゆるチャガタイ文語）で記されているが、アラビア語風である指導者の名を正式のアラビア語式に綴ったものと考えられる。

なお、最上部に数字の「2」のような形が確認できるが、その意味は不明。

3. 裏面の銘文

「*duriba dār al-sulṭanat Kūjā*」（下部から反時計回りに読む）

「統治の地、クーチャーで打たれた」

最初の語「*duriba*」はアラビア語銘文を持つ貨幣のほとんどに見える語であり、動詞「*daraba*（打った）」の受動態完了形「打たれた（＝打刻された）」を意味する（もっとも母音は表記されていないので、受動態というのは解釈にすぎない）。西アジアでは貨幣は打刻されるから、「打たれた」とは正に適切な表現であるが、このラーシーディーンの貨幣はいわゆる「新疆紅銭」と総称される一群に属し、打刻ではなく、鑄造である。つまり中国貨幣と同様の製造法ということになる。それにもかかわらず「打たれた」と記されているのは、イスラム圏で発行される貨幣の一般的な表現法に従ったものと解釈される。換言すれば、「打たれた」という表現それ自体にはすでに「打刻された」という意味はなく、単に「（貨幣が）製造された」ということを意味しているにすぎないと言える。

「*dār al-sulṭanat*」の「*dār*」は「家」が本義であるが、ここでは「地域、土地」を意味する。「*al*」は定冠詞、「*sulṭanat*」は「統治国」。「*dār al-sulṭanat*」で「イスラムによって統治されている土地」の意となろう。

この語はしばしばイスラム圏の都市の異名として用いられる。ラーシーディーンより少し早い時期のアフガニスタンのデュラニ朝の貨幣にも「*Kabul dār al-sulṭanat*」の記述が確認できるし、Hans Wehr⁽²⁾によればトルコのコンスタンチノーブルにもかつて同様の異名（同書の転写では*dār as-salṭana*）があったようである。

イスラムでは世界を「*dār al-salām*（平安の地）」と「*dār al-ḥarb*（戦争の地）」に分ける。イスラムの教えによって統治されている場所が「*dār al-salām*」、それ以外の土地が「*dār al-ḥarb*」である。本貨幣に記される「*dār al-sulṭanat*」もこの「*dār al-salām*」と同様の意図による表現と考えると大過ないと思われる。なお、この語の外側に製造年の数字があるはずであるが、判読できない。

最後の「*Kūjā*」は漢字で「庫車」と記される地名であるが、本来のアラビア文字には「*c*」を表す文字はなく、この貨幣でも文字としては「*j*」で記されている。

(1) 菅原純(1996)「クーチャー・ホージャの「聖戦」とムスリム諸勢力(1864-65)」(『内陸アジア史研究』11号) *ウェブ上にも公開されている(菅原氏のサイト)

(2) Hans Wehr(1994), *A Dictionary of Modern Written Arabic*, Otto Harrassowitz KG.



表



裏



表



裏